



はじまるくん物語



作：西辻 茂
絵：奥山 洋介



第1話 はじまるくん物語のはじまり

はじまるくんは、‘なにかが星’からきた少年忍者です。年は12才。

2010年のはじめに、修行のため地球に来て、いまはPCR部の社会貢献事業の手伝いをしています。+++はじまるくん物語のはじまりです。+++

オーグス総研PCR部で、社会貢献事業の打合せをしていたときでした。

メンバーの1人が、「この活動をきっかけに、いろんなところでなにかがはじまればいいよねー。」と申しました。

「そうだ、そうだ！」

みんながそれに同調し、

「それなら、いっそのプロジェクト名を‘はじまる’、いやー‘はじまる’って子供の忍者みたいな感じがするから、‘はじまるくん’にしようか。」

そのとき、どこからもなく

「それは、僕だよ。」

との声とともに、少年忍者が現れました。

「僕の名前は‘はじまる’って言うんだ。」

「‘なにかが星’から修行に来ているんだ。」

「さっきから聞いていたけど、みんなのために良いことをするんだったら、僕にも手伝わせてよ！」これが、はじまるくんの登場でした。

第2話 はじまるくんが地球に来た

はじまるくんは、なにかが暦（なにかが星の暦）で401年の正月零時に、なにかが星を出発して地球にやってきたのです。そして、はじまる星の歴史書によれば、はじまるくんの祖先は、地球の伊賀・甲賀に近い山奥の村に生活していたそうです。このあたりは、おいおい話していきます。



さて、はじまるくんは、西暦2010年の偶然にも元旦に、地球にきています。場所は、そうあの昔はじまるくんの祖先が住んでいた山奥の森の中でした。はじまるくんが地球に着いた当初、はじまるくんは空気の悪さが気になりました。そして、自分の体がかかなり楽に、素早く動くことができることに気がつきました。はじまるくんは、なにかが星で忍者としての鍛錬を繰り返していましたが、それだけの理由ではないようです。懸命なる皆さんは、気づかれるかも知れませんが、どうも、なにかが星は地球に比べ重力が大きいようです。

そんなわけで、なにかが星で優秀な忍者だったはじまるくんは、地球に来て、飛び抜けて素早い動きのできる忍術使いとなるのでした。はじまるくんは、その後一ヶ月ほど山奥を飛び回り、地球での環境に徐々に慣れていったのです。

第3話 だんだん人里へ

はじまるくんが地球に来て一ヶ月が経ちました。だんだん地球の環境にも慣れ、自分の忍法の発揮具合も把握でき、はじまるくんは、そろそろ人のいるところに降りていこうと考えました。そして、徐々に活動の範囲を広げるとともに、その時間も長くしていきました。最初は、人がいるとその素早い身動きで、見つからないように動き回っていましたが、だんだん、人の行動などわかるようになり、日本の子供の姿をして、人とすれ違ったりしていました。そうするうちに、だんだん子供の姿をして行動する術も身につけてきて、ある程度の人数があつまるよ

うなところでも、ごく自然に振舞えるようになり、まるっきりその中に溶け込んでしまったかのようでした。

はじまるくんは、だんだん地球での動きに自信がついてきて、地球に来て二ヶ月以上たったところで、「キョウ」へいこうと決心したのです。

なにかが星の歴史書には、今の日本で言う近畿圏くらいの地図が



あり、そこには「イガ」、「コウガ」はもちろんのこと「ネゴロ」、「サイカ」、「キョウ」、「ナニワ」、「ナラ」、「サカイ」などがのっていて、まずは「キョウ」に行こうと、出発前から決めていたそうです。

第4話 なにかが星について

はじまるくんがいた、なにかが星とはいったいどんなところなのでしょう。

今回は、なにかが星をちょっと垣間見てみましょう。

大きさは地球の約1/2分の1（直径で）、重力は約1.2倍、約70パーセントが海、気候は地球とほぼ同じ、一番高い山は海拔約3000m、かたちが富士山に似ているので、なにかが星でも‘ふじの山’と呼ばれています。

金属資源は少ないため、いろいろな種類の木材をうまく使って、建築物を含めいろいろなものを作り出しています。木の種類を組み合わせること、そして木から作った炭素や木から抽出した樹脂の混合物を、しみこませたり、接着用に使ったりすることにより、軽い材料であったり、耐熱性のある材料とか、強度のある材料などを作り出す技術が確立していることによるのです。

金属は、ぜんぜん使っていないことではなく、電気を通すためとか（炭素も使っていますが）、建築物の骨組みの一部とか使われています。

はじまるくんの刀も、そうですね。



エネルギー^{めん}一面は、どうなんでしょう。

はじまるくんの祖先^{そせん}が、この星^{ほし}に来たときは、もちろん木材^{もくざい}を燃やしたり、炭^{すみ}を作^{つく}ってそれを利用^{りよう}したりしていました。

燃える石^{いし}や、燃える水^{みず}は、ほんの少し^{すこ}発見^{はっけん}され、それも使^{つか}っていましたが、ほとんどは、炭^{すみ}が主燃料^{しゅねんりょう}となっていました。

それからだいがたち（なにかが暦^{れき}150年^{ねん}くらい）、あるとき水^{みず}の中^{なか}から、気体^{きたい}が上^あがってくるのが発見^{はっけん}され、それが燃えることに気がついたので。

燃える空気^{くうき}の発見^{はっけん}です。

それを集^{あつ}め、保^ほ存^{ぞん}し、送^{おく}り出^だす、技術^{ぎじゆつ}も確立^{かくりつ}していったのです。

この燃える気体^{きたい}の発見^{はっけん}が、さらなる大きな発見^{おお}、ひいてはすごい文明開化^{ぶんめいかいか}につながっていくのですが、その話^{はなし}は次回^{じかい}にお話^{はなし}するとしましょう。

第5話 続なにかが星^{せい}について

燃える気体^{きたい}ですが、池^{いけ}や湖^{みずうみ}、沼^{ぬま}など水^{みず}の中^{なか}からわいてきて、よく調^{しら}べるとどうも、二種類^{にしゆるい}の気体^{きたい}なのです。また、昼^{ひる}しか発生^{はっせい}していないこともわかりました。

一方^{いっほう}は、火^ひかついて燃える、混^まぜると爆発^{ばくはつてき}的に燃える、もう一方^{いっほう}は燃えているものをものすごい燃え方^もにする気体^{きたい}なのです。

これを分離^{ぶんり}する方法^{ほうほう}を見つけ出し、片方^{かたほう}を気体燃料^{きたいねんりょう}、そしてもう片方^{かたほう}を、炭^{すみ}の燃焼炉^{ねんしょうろ}に送^{おく}り込^こみ、高熱^{こうねつ}を発生^{はっせい}する炉^ろとして使^{つか}っていったのです。

そして、発生^{はっせい}しているところを良く調^{しら}べてみると、特定^{とくてい}の鉱石^{こうせき}が関係^{かんけい}しているようです。彼^{かれ}らは、これを気生石^{きしょうせき}と呼んで調べていましたが、どうもなにかが星^{せい}には、かなりの気生石^{きしょうせき}の鉱脈^{こうみやく}があることがわかってきました。



その後、この気生石の気体発生量を向上させる、精錬方法が確立し、この気生石を、人口の池に並べ、かなりの気体を発生させることに成功して行くのです。また、この気生石をさらに分析するため強い光を当たるとき、間違って落とした金属片に火花が飛んだのです。なんと、やっても同じことが起こるのです。これが、気生石に対するの画期的な発見でした。そして、なにかが星の人たちが、電気を手に入れた瞬間だったのです。

第6話 続続になにかが星について

そうなんです。

気生石というのは、自然にできた太陽電池の仲間だったのです。

それが水中にあって、光が当たると電流が発生し、水を電気分解し、水素と酸素を発生させていたのです。

そして、それ以降の研究で、電気を光に変える電球や、動力に変えるモーターが次々と発明され、エネルギーとして電気が、多く使われるようになっていったのでした。

これをきっかけに、なにかが星での産業革命が起こったのです。

それは、なにかが暦でいう200年代後半のことでした。

金属の埋蔵量が少ない→木材の多用=伐採が進み、また燃料としての炭の多用から、なにかが星の大気にCO2の量が増え、異常気象が多発するようになって来ました。

地球に比べて、小さい星なのですぐに影響が出て来てしまうようです。

そこに対する研究も進み、エネルギーの使い方や産業のあり方についての見直しが行われるとともに、砂漠化したところに対する緑化を進めていきました。

そのようにして、なにかが星は、だんだん昔の環境を取り戻しながら、産業の恩恵をも受ける、うまいバランス状態にだんだん近づいていっている状況のようです。



また唐突ですが、地球と比べて、一日の長さは大体同じなんです、一年の長さは若干短いようです。

第7話 はじまるくんキョウへ向かう

いよいよ、はじまるくんはキョウへ向かうことになりました。

はじまるくんが地球に来て、今までにない人ごみに行くのですから、最初は時間をかけていくことにします。

はじまるくんが山をはなれると、どんどん空気がおいしくなくなってくるのに気がつきました。そして、はじまるくんの星である、なにかが星は、エネルギーとしては電気と水素の文化なので、はじめて地球の車を見たときに、後ろから煙のような気体を吐き出しているのに、びっくりしたのです。

そう、なにかが星の車は、電気で動いているのです。

また、なにかが星は、材料としては木がメインの文化なので、大部分が金属でできている車をもみても、びっくりしたようです。

どうやらキョウは京都と呼ばれているようです。

ビルは、なにかが星では鉄骨は一部使われていますが、やはり強化木材が主流なので、東大寺の大仏殿の倍くらいの大きさの建物は、あります。

京都に行く途中では、あまり高層ビルがないので、その大きさには違和感がないのですが、コンクリートという無機質的な感じの外観には、ちょっと違和感を持ったようです。



ひと こうつうりょう おお にもなれ、かなり きょうと ちか 清水寺 きよみずでら に入りました。
 はじまるくんは、ここを ちゅうしん 中心に きょうと 探索 たんさく してみようと おも 思いました。
 どうも、こういった かん 感じの じいん 寺院が、なにかが せい 星にもあり、 もくぞうけんちくぶつ 木造建築物ばかりの かんきょう 環境に、 やす 安らぎをおぼえたのでした。

第8話 はじまるくん、京都にて

はじまるくんは、京都の きょうと 賑わい、ビルの高さ、 たか 多さ、そしてなんと おお いても、 あか ネオンの 明るさに びっくり しながら、いろいろ み 見て ま 回っていたのです。
 そんなところも おお 多いのですが、 おお 大きな お寺や てら お宮も みや おお 多いので、そこを いろいろ めぐったりも して おりました。

はじまるくんは、修行も しゅぎょう わす 忘れては いけないと、 あらしやま 嵐山、 くらまやま 鞍馬山、 ひがしやま 東山、 ひえいざん 比叡山なども よ よ 夜な夜な か めぐ 駆け巡ったりも しています。
 ときには、 うみ 海と思える おお よな おお 大きな みずうみ 湖を みて、 ああ そう いえ ば、 みやこ 都の そばに ビワコ とか 言う みずうみ が あった なーと、 なにかが せい 星での い つた 言い おも だ 伝えを 思い出 したり して いました。

ある ひ 日、はじまるくんは いろいろ 光景 こうけい を め 目に しました。
 しろしやうぞく 白装束 を き 着た にんげん 人間が あや リーダー となった しゅうだん 怪しげな 集団です。
 なにか、 てら お寺や おみや お宮についたら、その リーダーが じゅもん 呪文を と 唱えているのです。
 その まわ 周りについた しゅうだん 集団は、その リーダーを さんけい 尊敬するが ごとく たいおう 対応 しています。

はじまるくんは、その しゅうだん 集団について きました。
 そうすると、 ひえいざん だんだん 比叡山に のぼって いき、それにつれて しゅうだん 集団は しょうにんずう だんだん 少人数 になって いき、 さいご 最後は その リーダーが ひえいざん 比叡山の たてもの ある 建物 は に入っていくのです。
 はじまるくんは、 ちょっと そこ ところで ようす 様子を うかが することに しました。

やがて、 よる 夜も ふけて きて、はじまるくんは たてもの その 建物の まわり ひそ に 潜んで いたのですが、 しんや 深夜も す 過ぎる ころ、
 ガラーッと おと 音が して、 しろしやうぞく 白装束 が 出て きて、 とつぜんやま 突然山 を かけ はじ 始めました。



はじまるくんは、それについて気づかれないように一緒に山をはしりはじめました。
 はじまるくんにとっては、そんなに無理をしなくてもついていけましたが、これは只者ではないぞ、と思っ
 たのです。

やがて夜が明けるとともに、市街地に下りてきて、昨日と同じことが始まりました。

すごい人が、地球にもいるのだと思った、はじまるくんでした。

そう、白装束の人は、千日回峰の行者さんだったのです。

京都で一ヶ月すごしたあと、はじまるくんはナニワに向かおうと決め、嵐山から桂川にそって出発し
 たのです。

第9話 はじまるくん京都を離れる、エコラインステーションへ

はじまるくんは、桂川に沿って歩いたり、桂川ですいとんの術を使ったりしながら、下っていきました。

やがて別の川と合流して大きな川になり、そのまま下っていくと長い橋にぶつかったのです。

はじまるくんは、ちょっと橋に上って様子を見ることにしました。

この頃になると、もう地球の車にも慣れてきて、たまにトラックの荷台に飛び乗ったり、別の車に乗り
 移ったりできるようになっていたのです。

しばらく、行き来する車を眺めていると、「限りある資源を大切にする・・・」と書かれたトラックが走
 ってくるではありませんか。

はじまるくんは、そのことばに惹かれ、そのトラックの荷台に飛び乗ったのです。

はじまるくんのいた、なにかが星でもこういう意味のことばが、小さい頃からたたきこまれていたからな
 のです。

そう、なにかが星でも産業革命後、物があふれ環境破壊へとつながっていった時期があったのです。



前にも言いましたが、なにかが星は小さいので、すぐに星全体の大きな問題となってしまう、大きく反省をせまられることになったので、戒めのことばとして、その言葉が引き継がれてきているのです。

はじまるくんは、その言葉を見ると、地球でもこのことばが大事ではないかと、反射的に感じ、ついついそのトラックに飛び乗ってしまったのです。

はじまるくんは、トラックに乗ったまま、とある会社のエコラインステーションにやってきました。

はじまるくんが、見つからないように事務所のなかにかくしているとき、こんな事が書かれている、額を見つめました。

せっかく生まれた命だから
 万人も万物も精一杯
 共存し共生し調和して
 命を受け命を育み命を繋げ
 みんなでそんな環境創って
 生きたいってそう思うんです。

「これって、なにかが星の憲法みたいなことが書かれているな。」
 こう思った、はじまるくんは、「ちょっとここにとどまって様子をみてみようか。」と決めたのです。

こうして、はじまるくんはしばらくのあいだ、そこでやられていることをながめ学んでいました。ここは、物を大切に^{もの たいせつ}して使えるものはもう一度^{つか}使えるように、東京葛飾^{とうきょうかつしか}とかいうところに送^{おく}っているみたいだな。そんなことを、見ていたのです。

第10話 はじまるくんついにオージス総研へ現る

一週間ほどたって、「尼崎^{いちじゅうかん}に物の集荷^{あまがさき}に、いくぞー。」こんな声とともに、車^{くるま}のエンジンがかかりました。

ずっと同じところに潜^{ひそ}んでいたはじまるくんは、新しいところ^{あた}らにいてみたいと、思^{おも}っていたときでした。すばやい身^みのこなしで、その車^{くるま}にし^しのびこむと、やがて車^{くるま}が走り出^{はし}しました。



そのうち車^{くるま}は、普通^{ふつう}の道より高いところにある道^{みち}に上^{たか}り、高架^{みち}をまたいで走る電車^{あが}の横^{こうか}を走り、ものすごく早^{はや}く走る電車^{はし}の道^{でんしゃ}の下^{よこ}をくぐり、お椀^{わん}に顔^{かお}が書^かかれている塔^{とう}を右^{みぎ}に眺^{なが}め、空飛^{そらと}ぶ乗り物^{もの}の下^{した}を走^{はし}ったかと思うと、やがてまた普通^{ふつう}の道^{みち}に下^おりたのです。しばらく走^{はし}った後^{あと}、車^{くるま}はあるところにとまりました。

その看板^{かんばん}には、株式会社^{かぶしきがいしゃ}オージス総研^{そうけん}PCR部^ぶと書^かかれていました。はじまるくんは、その建物^{たてもの}に忍^{しのび}び込む^こことにしました。

その建物^{たてもの}には、額^{がく}がかかっており、‘企業理念^{きぎょうりねん}’と書^かかれていました。

- 一、お客さまの心を心として仕事を進めます
- 一、優れた品質と高い技術力を追求します
- 一、あたたかさ、たくましさ、たのしさを大切にします

「いいことが書^かいてあるなっ。」と思^{おも}ったはじまるくんは、ここにしばらくいてみよう^きと、決^きめたのでした。

PCR部に潜んでから、2～3日たった時でした。

この人が5～6人、ある部屋に入って話し合いをしている様でした。

はじまるくんが、忍んでその内容を聞いていると、

「それなら、いっそのプロジェクト名を‘はじまる’、いやー‘はじまる’って子供の忍者みたいな感じがするから、‘はじまるくん’にしようか。」

こんな声が聞こえたのです。

その時、はじまるくんは、「それは、僕だよ。」と言って、みんなの前に姿を現したのです。

これで、第一回目の話のところにつながるのです。

はじまるくんが、地球にきてからPCR部へたどり着くまでの間、こういう旅を経てやってきたのです。

400年ほど前、はじまるくんの祖先は地球にいたという話でしたよね。

それは、どうなっているのでしょうか？

そのあたりは、次回からの話でだんだんわかってくるのです。

第11話 戦国時代

時は戦国時代の日本。

忍者の里として、伊賀や甲賀は有名ですが、その近くの秘境に‘なにかが村’という誰にも知られていない村がありました。そこには、5～600人ぐらいの人が住んでいました。

当時の日本の最先端の技術・文化を保有している、忍者の村です。



それは、人知れずの地域的に閉じた村なのですが、日本各地の優れた技術文化を取り入れるため、高い技術文化をもったそれぞれの地区に、そとむらびとを送り込み高い技術・文化・芸術・医術・武術などを吸収させ、それを自分の村に持ち帰ったからなのです。

また、あるときに宣教師を助けた縁で、外国にもむらびとが行ったりして、外国の技術文化にも精通していました。

というわけで、「なにかが村」の人たちは、争いを好まず、高度な技術を持ち、すばらしい文化芸術を好み、自然を愛する生活を送っていたのです。

こういった生活を続けるためには、外部にその存在を知られないほうがよいと、考えていたのです。

ただし、万が一周りの国にその存在を知られ、攻め込まれた場合の事を考え、武術・忍術の訓練は行い続けていました。

また、当時最新の武器を持ち、いざとなれば最強の武装集団となることができるようになっていたのです。

ただ、これとて最後の手段として考えており、なるべくその力を発揮しないですむように考えていました。

第12話 後水尾天皇ご即位

この「なにかが村」、ハイテク・インテリ・最強武装忍者集団、平和主義集団を、擁する「なにかが村」こそ、はじまるくんの祖先が住んでいたところなのです。

1611年、世の中では後水尾天皇ご即位に際して行われた、二条城での家康と秀頼との会談以降、豊臣側の憤懣が高まってきております。

徳川討つべしの気運が大坂城内での主流を占めるようになったころ、真田幸村はひよんなことから、この「なにかが村」の存在を知り、なんとか豊臣方に付かせようと考え始めたのでした。



そこで、忍びの者を放ち、場所を探そうとしましたが、いくら探しても見つかりません。一方、‘なにかが村’では、周辺を忍びの者の動きが激しいことに気が付いていました。

第13話 真田幸村の追っ手

真田幸村の追っ手は、かなり‘なにかが村’に近づいていたのですが、何かその場所を避けてしまうような動きをしてしまうようで、何も見つからない状態なのです。

これは、‘なにかが村’の村民（忍者）が、彼らが作りだした、いまで言うイリュージョンのような仕掛けをつかって作り出した、架空の環境が、どうもそうさせてしまっているようなのです。

当時で言う、妖術なのでしょう。

平和を望む彼らのことですので、捕まえて斬って捨てるようなことは、しない工夫なのです。

ですから、幸村へあがってくる報告も、‘いまだ見付からず’状態が続いていたのです。



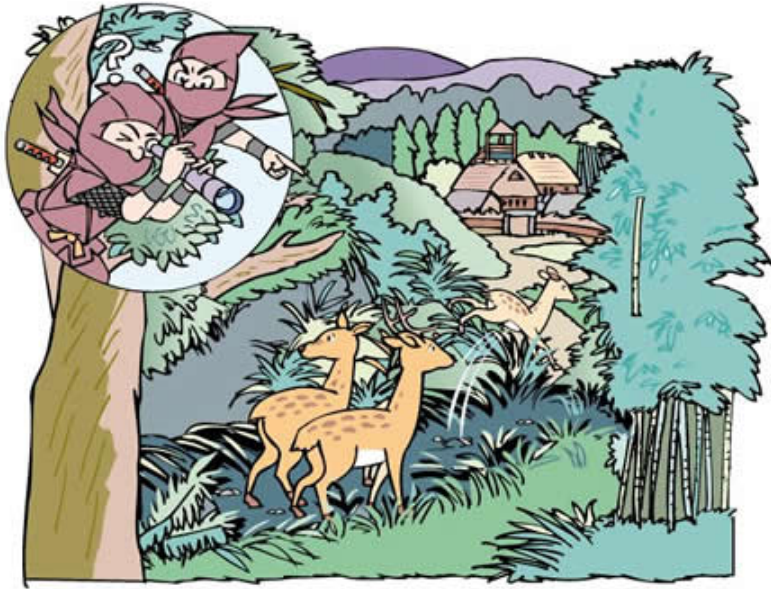
幸村は、何かあると察し、配下で一番の忍びの者、三代目石川五右衛門を呼び寄せました。

幸村は、三代目五右衛門に「豊臣の存亡のためにも、あの村を味方につけなければならぬ。」と言い、必ず使命を果たすよう言い付けたのです。

第14話 三代目五右衛門

三代目五右衛門は、今までの忍びの者からの報告から、‘なにかが村’の場所に目っこをつけ、すぐさま近くまでやってきました。

そのあたりの探索を始めるかと思いきや、さすが五右衛門の子孫、見晴らしの利くところに潜んで、遠めがねを使い様子を見ることにしたのです。



一週間ほどたったとき、三代目はあることに気がつきました。
人は気がつかないような感じでぜんぜん通りもしないようなちょっとしたところに、獣はよく通り抜けている場所を見つけたのです。

きっとこれに違いはないと思った三代目五右衛門は、夜になるのを待って、その場所に行き様子を見ていました。

そのとき家族と思われる鹿が数匹、目の前を通っていきました。
三代目は、サッとその群れについていきました。

ちょっとの間、鹿とともに走っていくと、突然視界が開け人里が現れたのでした。

第15話 矢文

そうなんですネ。



この人里こそ‘なにかが村’なのであろうと、確信した三代目五右衛門は、三本の矢を取りだし、それに幸村の親書をくくりつけ、(ランボーのように)弓をキリリとひき、めぼしい家に向かってその矢を放ったのです。

しんしょ ないよう
親書の内容は、

- 一、豊臣側について欲しい
- 二、首領と会談したい
- 三、このそんざいは、自分の胸にだけしまっておく
- 四、了解なら、明日の明け方、狼煙を三回上げて欲しい

このようなものでした。

しゅりよう ほうこく
首領にその報告があがると、「^{ぜんこく}全国に散らばっている仲間^{なかま}に帰ってくるように。」という指令^{しれい}を^{はつ}発したのです。

第16話 No Reply

さんだいめ ごえもん やぶみ い つぎ ひ
三代目五右衛門が、矢文を射ってから次の日になりました。

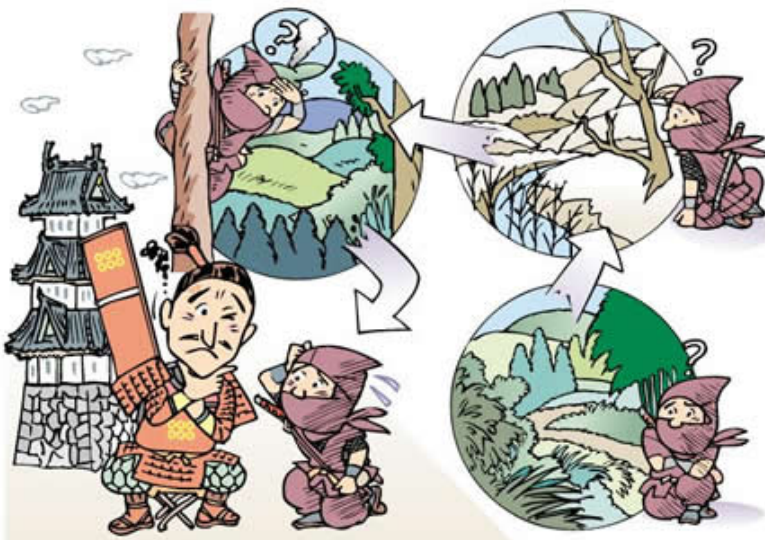
やぶみ ぬ
矢文は抜かれていましたが、その村^{むら}から狼煙^{のろし}はともかく、何^{なん}の応答^{おうとう}もありません (No Reply)。

ひ たか
日が高くなったところに、また同内容^{どうないよう}の矢文^{やぶみ}を、今度^{こんど}は一本^{きのう}昨日^{やしき}の屋敷^むの一つ^{はな}に向けて放ちました。

やはり矢文^{やぶみ}は抜かれてはいましたが、何^{なん}の応答^{おうとう}もありません。

ここが、‘^{むら}なにかが村’であることを確信^{かくしん}した、三代目^{さんだいめ}はとりあえず真田幸村^{さなだゆきむら}に報告^{ほうこく}のため大坂城^{おおさかじょう}に戻^{もど}ることにしました。

おおさかじょう もど さんだいめ ごえもん さなだゆきむら かいだん
大坂城^{おおさかじょう}に戻^{もど}った三代目^{さんだいめ}五右衛門^{ごえもん}は、真田幸村^{さなだゆきむら}と会談^{かいだん}しました。



そこで、幸村^{ゆきむら}は徳川方^{とくがわがた}につかれると非常^{ひじょう}にまずいので、豊臣^{とよとみ}につかせるか‘^{むら}なにかが村’^{ほろ}を滅ぼすか、どちらか^{かんが}だなど考えたのです。

17. 1613年の年の暮

再び‘なにかが村’に戻った三代目五右衛門は、雪のちらつく中、三度目の矢文を放ちました。

その内容は、「豊臣 or 滅亡。味方に付かなければ、年明けに一万の兵で攻撃する。」です。

それでも、‘なにかが村’からの返事はなく、雪の積もった村はひっそりとしずまりかえていたのです。

一方、年の暮れの太坂城下には、‘なにかが村’のスーパー忍者三名が入り込んでいました。



彼らは、城内でのあわただしい雰囲気を感じ取っていました。

太坂城では、徳川方にこの動きを察知されないよう、行動していましたが、さすがスーパー忍者、兵力を順次どこかに送り出していることを見抜いたのです。

彼らは、早速村に帰ることにしました。

村に帰る途中、何か人の動きが違うことに気が付いていました。

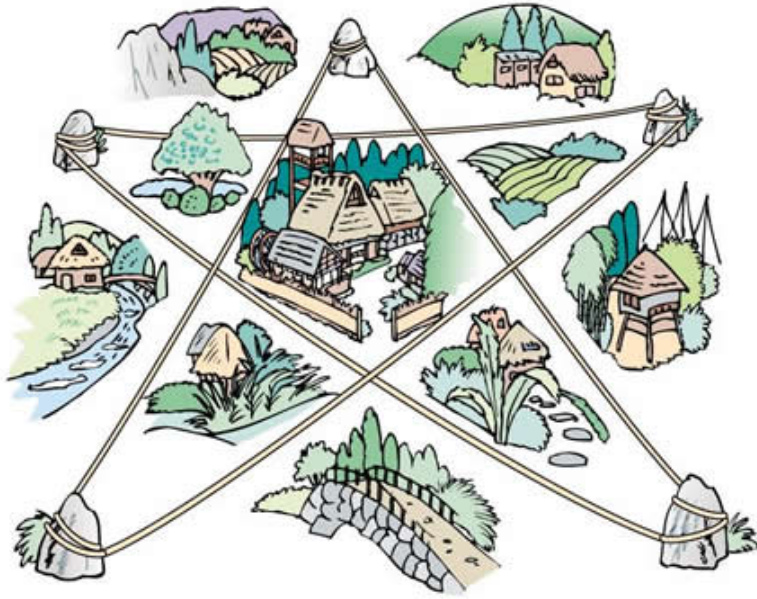
彼らの帰る時につかんだ、兵力だけでも四、五千にはなりました。

第18話 結界

三人から報告を受けた、首領は矢文の内容は正しく、真田幸村は豊臣につかない限り、本気でせめてくるだろうと思いました。

いくら優秀な忍者軍団であっても、各国に散らばっている仲間が帰ってきてはいるものの多勢に無勢、勝ち目は無いだろうし、そんな戦いに村民を巻き込むのも是としません。

そっと抜けだして徳川についても、幸村の言うとおりに豊臣についても、戦に巻き込まれるのは必定です。



そこで、^{しゅりょう}首領は^{ちやうろう}長老に^{さいしゅうけつだん}最終決断の^{そうだん}相談をすることにしました。

^{ちやうろう}長老は、^{しきゅうむらぜんたい}至急村全体を^{かこ}囲むような^{ごぼうせい}五芒星の^{けっかい}結界を作るよういいました。

^{むかし}昔からの^い言い^{つた}伝えを^{じっこう}実行しようとするのです。

^{ごぼうせい}五芒星の^{ちやうてん}頂点となるところには、^{いし}ピラミッドのような石があり、それを^{まきた}真北の^{いし}石から^{はじ}始めて、^{ひとふで}一筆書きになるよう^{わら}藁で^あ編んだ^{なわ}縄で、^{けっかい}結界を^{つく}作っていくのでした。

19. ^{ゆきむら}幸村の^{うご}動き

もう^{とし}年の^{くれ}暮も^せせまったころ、^{ゆきむら}幸村も‘^{むら}なにかが村’^{ちか}近くの^{おお}大きな^{てら}お寺にか^ままえた^{じん}陣に^{とう}到着しました。

そこには、^{めい}500名ほどの^{さむらい}侍が入っており、^{ほか}他は^{いどうちゆう}移動中か^{ちか}近くの^{とよみがた}豊臣方の^{しろ}城や^{とりで}砦、^{ちか}ならびに^{てら}近くのお寺^{みや}お宮にいました。

^{そうぜい}総勢^{いちまん}一万人^{にん}弱^{あつ}が集まりつつあります。

^{ゆきむら}幸村は、^{じん}陣に入るや^{いな}いなや^{さんだいめ}三代目^{ごえもん}五右衛門から、^ごその^{うご}後の^き動きを聞いていました。

「‘^{むら}なにかが村’では^{とく}特に、^{たか}戦いの^{じゆんび}準備を^{むら}している^{ふとめ}わけでもなく、^{なわ}藁で^{じめん}太目の^{くかく}縄を^{わり}割している^{たふつう}くらいで、^かその他^{つづ}普通と^な変わらない^{ごえもん}暮らしを^{つづ}続けている。」、^ごこう^{えもん}五右衛門は^いいいました。

^{ゆきむら}幸村は、^{さんどめ}三度目の^{しやうじき}正直、^{いっかい}もう一回^{やぶみ}矢文を^{しやうがつ}正月の^{ふつか}二日に^{ほな}放つことに^きすると決めました。



「これが最後通告である。何も返事がないときには、豊臣に付かないと判断し、一万人の兵で総攻撃をする。」
 こんな内容です。

そして、総攻撃の日を、三が日のあけた四日に決め、元日までは兵を休ませ、元旦の日については、それぞれの陣で正月を祝うように言いました。

そして、二日からは徐々に戦闘態勢に入っていくよう指令しました。

20. 一方‘なにかが村’では

首領は、このことを長老に相談していました。

長老曰く、昔からの言い伝えで、「‘なにかが村’に困ったときには、大晦日から新年にかけて、ある儀式を行うように。そうすれば、村全部が救われるであろう。」というのがある。

その式と言うのは、結界のなかに、村人全員と必要最小限の物品、動植物を集め、全員である真言を唱えながら新年を迎えると言うもの。

そんなわけで、‘なにかが村’には結界が張られているのです。



‘なにかが村’のほうでも、幸村の動きを察知するための忍者が、各陣を見張るとともに、幸村の手勢の‘なにかが村’の見張りの動きをつかんでいました。

その見張りに、わからないように必要なものは結界の中の屋敷に集められ、大晦日の夕方には、ほとんどその作業は終わっていました。

第2話 真言

‘なにかが村’では、昔からの言い伝えの儀式の準備がそろいました。ここで唱える真言ですが、新年寅年の守り神は虚空菩薩の真言で「オン バザラ アラタンノウ オンタラク ソワカ」、それと「虚空蔵求聞持法」で用いられる「ノウボウ アキャシャ ギャラバヤ オン アリキャ マリ ボリ ソワカ」。

この二つを、唱えることになります。



日が落ち始めた頃から、色々な地方へ、‘草’としていていた村人を含め、全員が結界の中に入り、太鼓、鐘、拍子木などを打ち鳴らしながら、全身全霊をこめて、真言を唱え始めたのです。

それを見ていた幸村の見張りは、この村ではこういう新年の迎え方をするのかと、思っていました。

時がたち、日が変わろうとする頃、結界のあたりにもやが立ち始め、どんどん濃くなっていきました。

やがて、そのもやは、隣の人間さえ見えなくなるほどでした。

それでも、熱狂的な真言は続きます。

「オン バザラ アラタンノウ オンタラク ソワカ」、
「ノウボウ アキャシャ ギャラバヤ オン アリキャ
マリ ポリ ソワカ……」

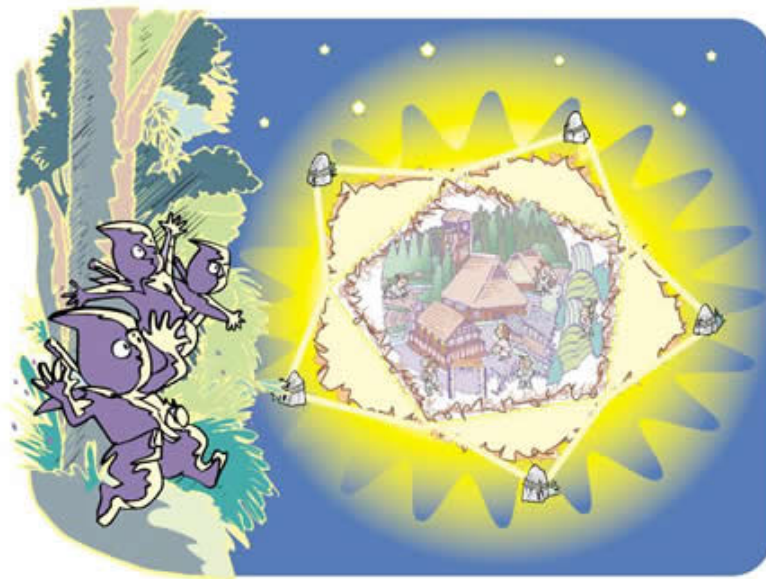
しばらくして、だんだんもやが薄くなり、周囲が見えるようになってきました。

2.2. 見張りの目

幸村の見張りは、ずっと‘なにかが村’を見ていたのですが、最初は変わった新年の迎え方をするのだと思っていました。

だんだん村人が、熱狂的になるに連れて、もやがどんどん濃くなってきて、ほとんど村人が見えなくなり、もやがまるで白い塊のようになったと思った瞬間、そのもやの周りで鋭い閃光が走りまわりました。

その閃光がもやを包み込んだと思った瞬間、いままでなり続けていた、太鼓や鐘、銅鑼、笛や歓声（真言）がきえ、あたりに静寂がもどり、遠くからきこえる除夜の鐘が聞こえるのみとなりました。



その静寂とともに、だんだん薄くなってきて、最後にはすっかりなくなりました。

見張りは、村人が何もいないことに気が付き、もやが発生していたあたりに駆けつけました。

よくみると、何件かの家もなくなっていて、もやの濃かったところのあたりは、草も木もなくなっており、よく観察すると無くなっている部分は、五角形の形に土地がえぐられているような感じになっているのでした。

第23話 もやの中の村人は

もやのなかの村人は、もやが薄れてくるの感じながらも、まだまだ真言を続けていました。

その内もやがどんどん薄くなり、となりの人がわかるようになり、やがては完全に無くなってしまいました。

それから、太鼓がべの打ち方に変わり、最後の打ち止め
「ドーン・・・ドーン・・・」

で終わり、あたりは静寂に包まれました。



村人は、それぞれ周りをみわたり、周りの人間がもやる前と同じように存在するのが確認できました。

やがて、群集の外の方にいた村人たちが、騒ぎ始めました。

「周りの景色が違う・・・。」

よく見るとたしかに、黒いシルエットのように見えている、周りの山の形がもやのではじめるまえと違います。

そこで、首領は十人ほどの手勢を、周囲に走らせ周りを調べてくるよう、命令しました。

調べた結果、五角形の結界の中は、今までとおなじで、その外はすっかり様子が違っていることがわかりました。

さてポルトガルへ行っていた村人は、もやが晴れると星の感じがまるで違っているのに気づいていました。

そこでかれは、遠めがねを取り出し、夜の空を観察し始めたのです。

第24話 そこは？

天文知識のある村人たちが、天体を観察し始めてかなり時が過ぎ、やがて東のほう明るくなってきました。

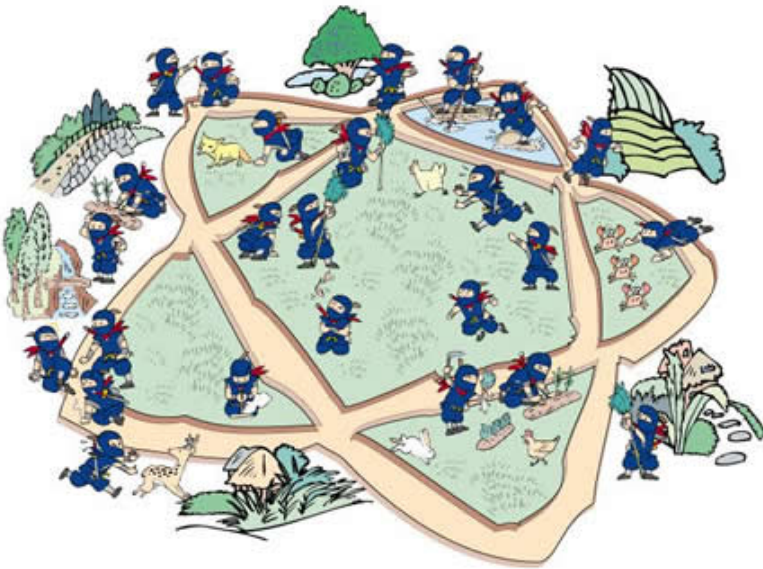
結界の中にいた 鶏 たちが、いっせいに鳴き始めて、夜が明けるようです。

時がたつにつれ、どんどん周りが明るくなってきて、ついに太陽が上りはじめました。

その太陽の上るのも観測していた、村人たちはお互いに意見を言い合っていました、やがて結論が出たようです。

その一人が、首領にこう言いました。

「どうも、いままで住んでいたところと、まったく別のところのようです。もっといえば星が違うというのが、われわれの結論です。」と。



首領は、天文知識がないので、星が違うと言われても、何のことかわかりません。

そこでその村人は、ポルトガルより持ち帰った地球儀をとりだし、天体のことを説明し始めました。

洞察力の鋭い首領は、前に住んでいたのは地球という星で、ぜんぜん違う星に来てるといふ事をおぼろげながら理解し、それがきっと正しいのだろうと考えました。

そして、忍術の技量に優れた15名を集め、3名ずつの班にして、それぞれ五角形の頂点方向にむかって探索するように、指示を出しました。

残った村民には、結界の中にある食料でもって朝食の準備をさせたり、五角形の周辺を農地に向かうかどうか、家を作るための材木となる樹木があるかなど、くまなく調査させるました。

それらからわかったことは、

- ・ どれも村人以外の人は、いないようだ。
- ・ 今後はどうなるかはわからないが、気候はもやの発生前と変わらない。
- ・ 周囲の土地を開墾すれば、結界の中にある、食料となる草木を植えることが出来そうだ。
- ・ この星の動食物で、食料になりそうなものがある。
- ・ 周囲に川が流れていて、水は引けそうである。
- ・ 周りにある木で、家を立てることが出来そうだ。

結界五角形の中には、ちょっと辛抱すれば半年分くらいの食料はあるので、そのあいだに食料を自給するようにすればよいのです。

ただ不安は、一年を通しての気候がどの様に変化するかがわかっていないので、地球と同じように、畑を耕すなどをして大丈夫かどうかなのです。

そういう疑問はありますが、首領は村人の得意分野にそって分担をきめ、村づくりを開始しました。

第25話 村造りは進む

それから、二十日ほどたちました。

やはり、技能に優れた人が多く、村造りはどんどん進んでいきます。

その星にどんなものがあるって、これは食料に使えるとか、これは何かの材料に使えるとか、海があることもわかり、ここで生きていけそうだとわかってきました。

そして、たまには暖かい気候の日もあり、地球の環境ともよく似ているようです。

そして、それからちょっとした後、天文グループが首領のところに来てきました。

そして、今までの天体観測の結果から、この星の動きは地球とよく似ていて、これから春になってきて、夏、秋そしてまた冬になるのではないかとのことでした。

われわれがこの星に来たのは、太陽の動きを中心とした暦では、ちょうど元旦にあたり、一日の長さは大体地球と同じで、一年は地球よりちょっと長いとの話をしました。そこでいうには、この星を‘なにかが村’から名前を取って‘なにかが星’とし、今年を‘なにかが暦’の元年（一年）とし、以後は太陽暦を使っていくことにしたい。

首領は、それにうなづき、そのおふれを出しました。

なにかが暦二年の元旦を迎えるときには、村民のすむ家は全部つくり、畑での収穫もでき、家畜も増え、海産物も取れるようになってきていました。

そこで、始めて迎える新年を盛大に祝うため、年越しのときに村民全員で大きなお祭りをするようになりました。

そして、年月がどんどんたっつき、そのあたりはこの物語の最初のほうに書いたとおりです。
そして、なにかが暦の389年の寅年を迎えた正月に、首領のところに嫡男が誕生したのです。



そして、首領はこの子が大きくなったときには、この星もは‘はじまる暦’5世紀になっている。
あたらしい世紀には、新しい何かが始まるようであればなあー。

そういう風に、もっていけるのは、この子しかいないであろう、というわけで‘はじまる’という名前をつけたのでした。

26. 大団円・・・

なにかが星、いや‘なにかが村’の時からだと思いますが、首領の嫡男にはあるしきたりがあります。

12歳になったら、ひとりで首領の家から遠く離れて、知らない世界を体験するという、修行に出ないといけないのです。

はじまるくんは、10歳くらいになったときから、そのことを考えていました。

いろいろ考えていたのですが、いつしかかつての‘なにかが村’があった星で、修行をしたいと思うようになってきたのです。

そして、‘なにかが村’のことや、なにかが暦元年にあった事象をかいた歴史書を、片っ端から読み漁ったのです。

そのなかから、はじまるくんとしての‘なにかが村’とそのときの日本のイメージが広がってきました。

また、地球への移動の方法についても、これでどうだという方法を考え付いたのです。

そこで、はじまるくん11歳（はじまる暦400年）の秋、お父さんである首領に、修行は地球に行きたい旨と、そこへ行く方法について相談したのです。

首領は、はじまるくんの意志が固いのを確認し、その移動法方法についてやってみる価値はあると判断し、全面的に協力することにしました。

その年の大晦日から新年（401年）にかけての実行です。

そこでさっそく、はじまるくん五人の力量のあるヤングをつけ、はじまるくんのいううとりに進める

よういつけました。

まず、はじまるくんとそのヤング衆^{しゅう}は、なにかが星^{せい}をめぐって、

五^{いつ}つのパワー^{かん}が感じられる小岩^{こいわ}を用意^{ようい}しました。



かつての結界^{けっかい}の岩^{いわ}は、それぞれご神体^{しんたい}としてお宮^{みや}で祀^{まつ}られていましたので、その小岩^{こいわ}をそれぞれのお宮^{みや}にはこび、ご神体^{しんたい}の岩^{いわ}の上^{うへ}に乗^のせ、それぞれのお宮^{みや}で祈^{きとう}祷^{とう}をしてもらいました。

そして、かつての結界^{けっかい}の中心部^{ちゅうしんぶ}に空地^あをつくり、かつての結界^{けっかい}とまったくの相似形^{そうじけい}となるよう、それぞれの頂点^{ちやうてん}にそれぞれの小岩^{こいわ}を置^おきました。

そして、縄^{なわ}を緋^ないその小岩^{こいわ}を頂点^{ちやうてん}に、その縄^{なわ}で一筆書き^{ひとふでが}の順番^{じゅんばん}で五芒星^{ごぼうせい}の結界^{けっかい}を作^{つく}ったのです。

いよいよ、大晦日^{おおみそか}の晩^{ばん}です。

結界^{けっかい}の中心^{ちゅうしん}には、はじまるくんが座^{すわ}り、結界^{けっかい}の頂点^{ちやうてん}の外側^{そとがわ}には、ヤング衆^{しゅう}の五人^{ごにん}がそれぞれ、はじまるくんを見る形^{みかたち}で座^{すわ}りました。

そして、まわりには星全体^{ほしぜんたい}からきた何千^{なんぜん}というひとが、太鼓^{たいこ}や鐘^{かね}などをてにもって集^{あつ}まってきています。

そして、大分暗^{だいぶんくら}くなったところで、来年^{らいねん}の干支^{えと}の寅^{とら}の、そうあの虚空^{こくう}菩薩^{ぼさつ}の真言^{しんごん}を一斉^{いっせい}に始^{はじ}めたのです。

どんどん、パワーが最高潮^{さいこうちやう}になってきたころ、結界^{けっかい}の周り^{まわ}りがもやで包^ままれてきました。

そして、ついにはもやの周辺^{しゅうへん}が光^{ひか}り始^{はじ}めたかと思^{おも}うと、もやがうすれてきました。

そして、そこにははじまるくんの姿^{すがた}は、結界^{けっかい}の頂点^{ちやうてん}の小岩^{こいわ}とともに消^きえていました。

一方^{いっほう}、はじまるくんはもやにつつまれて、それがどんどん濃^こくなって、それがうすくなったと思^{おも}ったら、ずいぶん景色^{けしき}が違^{ちが}うことに気^きがついていました。

同じ^{おな}なのは、結界^{けっかい}を作^{つく}っている小岩^{こいわ}と縄^{なわ}くらいなものでした。

まわりの景色^{けしき}を、よくみながら、かつての歴史書^{れきししょ}から書^かき写^{うつ}した、山の形^{やまかたち}などとみくらべて、これが地球^{ちきゅう}であることを確信^{かくしん}したのです。

そう、はじまるくんはこういう風^{ふう}にして、地球^{ちきゅう}にや^やってきたのです。

***** 完 *****

だそく
(蛇足)

というわけで、この物語は始めのところに戻るわけなんです。

ということでこの物語は、これで大団円ということです。

ただ、はじまるくんが活躍しているようになるのが、本当の意味での大団円だと思います。

そのためには、みなさんの‘はじまるくん’へ関心を持っていただき、そして何か協力したいなという気持ちがおこり、そして少しでも動き始めることが重要かと思っています。

みなさんのご指導、ご支援をはじまるくんは期待しています。

どうぞ、よろしくお願いいいたします。